# 武蔵陵墓地内埋蔵文化財調査報告（Ⅱ）

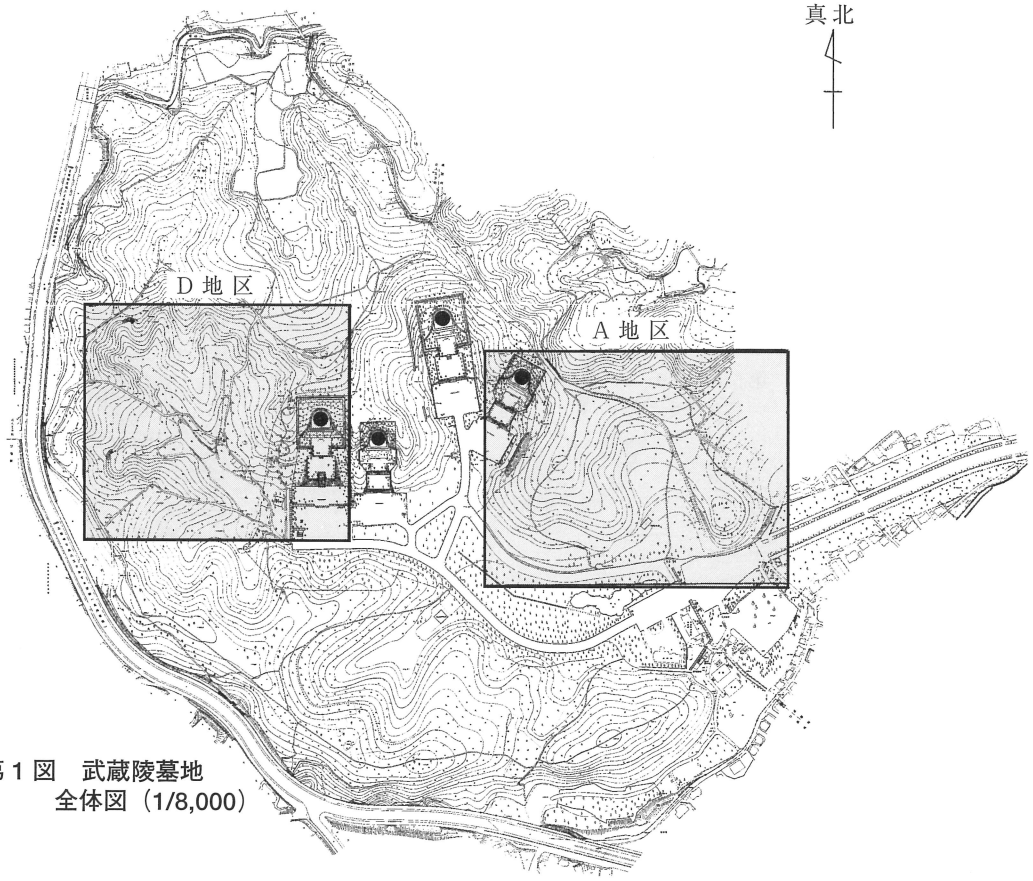
陵墓調査室

## はじめに

武蔵陵墓地は約46万㎡の敷地内に大正天皇、貞明皇后、昭和天皇、香淳皇后の４陵が営まれている（第１図）。本陵墓地の一部は、昭和天皇武蔵野陵築陵に伴う事前調査において縄文土器等が発見され、東京都から周知の遺跡（武蔵陵墓地内遺跡東京都遺跡番号1020）に指定されている。本陵墓地は今後とも陵墓が営建される場所であるので、遺跡の性格とその拡がりを確認するための調査を、平成７・８年度に実施した。この調査結果については、『書陵部紀要』第51号（平成12年３月31日刊行）に掲載したとおりである。

平成12年６月には香淳皇后が崩御し、武蔵野東陵が築かれた。この築陵に伴う工事箇所の調査結果は、同誌第54号（平成15年３月28日刊行）に掲載したとおりである。その後、武蔵野東陵に伴う工事・儀式、及び一般参拝等も一段落したため、本陵墓地内の埋蔵文化財調査を平成16年度から中長期的な視点にたって再開することとした。

調査は平成16・17年度の２カ年にわたり実施し、平成16年度の調査対象地域は大正天皇多摩陵の西側に拡がる丘陵部である（第Ⅴ次調査）。この地域は平成７年度の調査時において「Ｄ地区」としてトレンチを設定した場所であるが、その際の調査面積が僅少であったことと、１つの尾根についてのみの調査であったことから、隣接する尾根上にもトレンチを設定して遺跡の有無を確認することを目的とした。トレンチの設定数は10箇所であり、掘削面積の合計は約200㎡である。調査は平成17年２月21日から開始し、３月23




第１図　武蔵陵墓地
全体図（1/8,000）

日に終了した。

平成17年度の調査対象地域は、平成7年度の調査時において「A地区」としてトレンチを配置した場所であるが、その際トレンチを設定しなかった尾根部分を中心に約220㎡を調査した（第Ⅵ次調査）。設置したトレンチは7箇所であり、調査は平成17年11月7日に開始し、12月20日に終了した。

以下、それぞれの調査概要を記述する。なお、出土遺物については第Ⅴ次調査の出土品がわずかであったことから、第Ⅵ次調査において出土した遺物と併せて報告することとする。なお調査の実施にあたっては、八王子市教育委員会新藤康夫氏、土井義夫氏、戸井晴夫氏に現地でのご教示、ご指導を賜った。また、出土品のうち江戸時代の陶磁器類については、千代田区教育委員会後藤宏樹氏、水本和美氏にご教示をいただいた。冒頭に記して、謝意を表する次第である。

## 1　D地区の調査概要（第Ⅴ次調査）

大正天皇多摩陵の西側に拡がる丘陵地帯をD地区と呼称しているが、今回は平成7年度の調査においてトレンチを設定しなかった尾根を調査することによって、遺構・遺物の存否を確認することを目的とした（第2図）。調査箇所の基本的な層序は、以下の通りである。

Ⅰ層　表土。

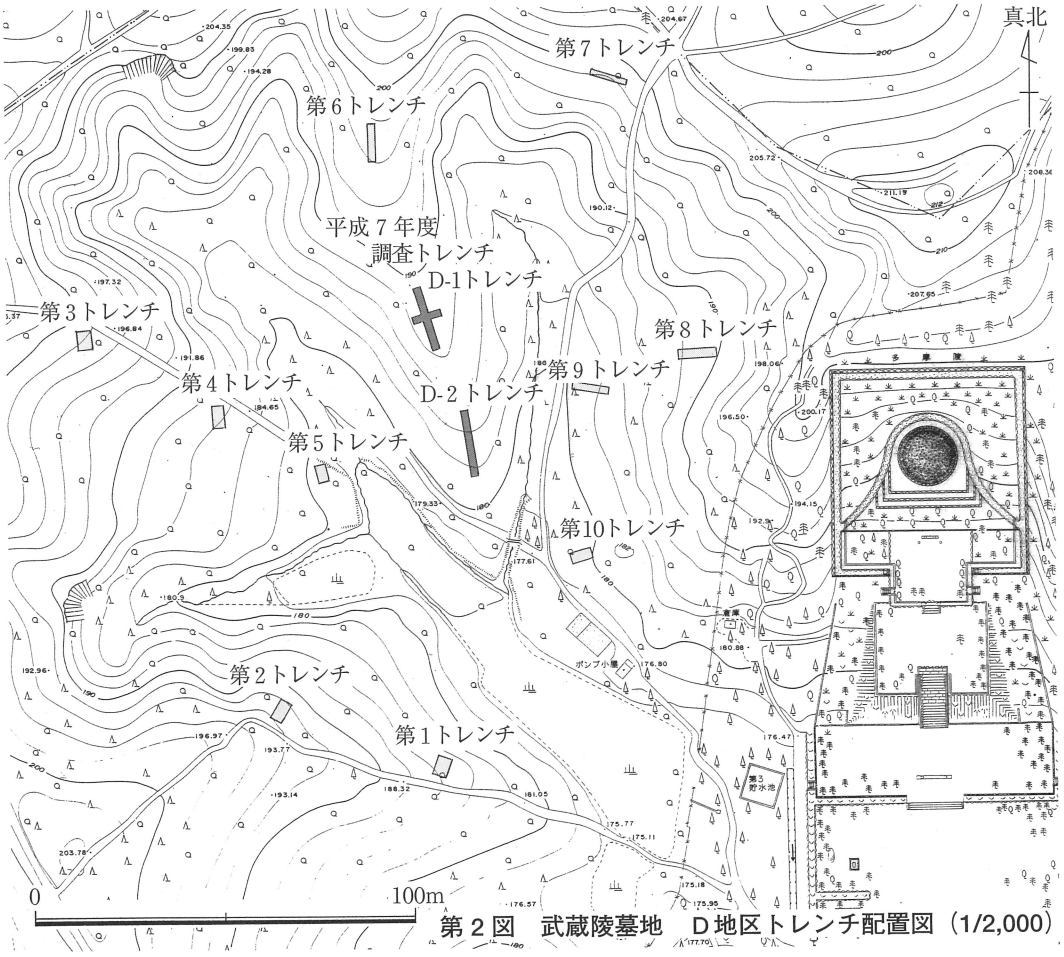
Ⅱ層　自然堆積土。黒色系を呈する比較的粘質土の高い土層。

Ⅲ層　ソフトローム土。赤色のスコリヤ粒を含むか否かによって、同じ漸移層を区分することができる。

Ⅳ層　遺構等内埋土。

Ⅴ層　風倒木などによる攪乱土。

Ⅵ層　ハードローム土。黄褐色を呈するローム層であり、地山である。




第2図　武蔵陵墓地　D地区トレンチ配置図（1/2,000）

### （1）各トレンチの概要

続いて各トレンチの概要は、以下の通りである（第３～６図）。

第１トレンチ（第３図１）　巡回路から北向きにわずかに下る斜面に設定したトレンチであり、４×５ｍの範囲を掘削調査した。Ⅰ・Ⅱ層の下に、Ⅲ層としたソフトローム層が検出された。床面の一部に土層の乱れたところがあり、その部分を掘削したところ長楕円形の落ち込み（1.6 × 1.0 ｍ　深さ 0.5 ｍ）が検出された。遺物はなにも出土せず、人為的な掘削であるか否かは判断できない。人為的なものとすれば、縄文時代の落とし穴の可能性も考えられる。

第２トレンチ（第３図２）　第１トレンチから 15 ｍほど尾根を登った位置に、３×６ｍの範囲を掘削調査した。土層の堆積状況は、第１トレンチと同様である。このトレンチでは、西壁に接して楕円形を呈する落ち込み２箇所が検出された。大きさは検出した範囲で、長さ 0.9 ｍ×幅 0.8 ｍほどを測り、深さは 0.9 ｍほどである。第１トレンチで検出した落ち込みよりも壁面が明瞭であるため、人為的な掘り込みである可能性が考えられる。但し、遺物はなにも出土せず、遺構とした場合には第１トレンチと同様、縄文時代の落とし穴が考えられる。

第３トレンチ（第３図３）　東向きに下る尾根の一番高いところに設定したトレンチであり、４×５ｍの範囲を掘削調査した。掘削の結果、表土下 0.6 ～ 0.7 ｍでハードローム層に達した。遺構は検出されず、遺物も一切出土しなかった。

第４トレンチ（第４図１）　第３トレンチから同じ尾根を 10 ｍほど下ったところに設定したトレンチであり、３×６ｍの範囲を掘削調査した。本トレンチでは土層断面図に示したように、複雑な土層堆積状況を示すが、トレンチの南端を幅 0.5 ｍほど深堀をした結果、小動物、もしくは木根による攪乱である可能性が高いと判断した。遺構は検出されず、遺物も一切出土しなかった。

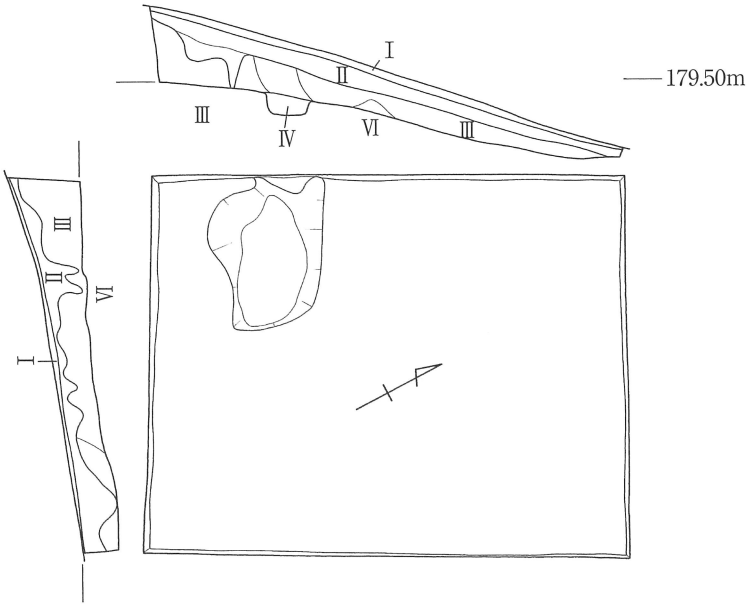
第５トレンチ（第４図２）　第４トレンチからさらに 10 ｍほど尾根を下ったところに設けたトレンチであり、谷に面したやや広い平坦地の一部を３×５ｍの範囲で掘削調査した。このトレンチにおいてはトレンチの床面中央やや南側において土色の違う部分が検出されたため、半裁して掘削し、性格の追究に努めた。この結果、最も深いところで 0.8 ｍほどの落ち込みとなったが、土層の堆積状況から考えると人為的なものではなく、倒木による土層の変化である可能性が高いものと判断した。また、本トレンチの東端・南端では、不明瞭な落ち込みがいくつか検出された。いずれも不整形なものであり、人為的な掘削による可能性は低いと考えられる。しかしながらこの落ち込みの流入土内から石匙が１点出土した。付近を精査したが他には遺物は出土せず、石匙が単独で出土したのみであり、遺構に伴うものではないと判断した。

第６トレンチ（第４図３）　平成７年度の調査においてトレンチを設定した地点からさらに 10 ｍほど高いところに２× 10 ｍのトレンチを設定して掘削調査した。掘削の結果、深さ 0.3 ～ 0.6 ｍでハードローム層に至り、遺構・遺物は出土しなかった。この尾根には、尾根と直行する方向に現地表面の観察によって溝状の落ち込みが認められることから、平成７年度と併せて今回もトレンチを設定して調査したものの、遺構はもとより、遺物も一切出土しなかった。現状で確認できる溝状の掘り込みが、山城の存在を示す遺構の可能性をもって調査にあたったところであるが、現在のところ山城の存在を裏付ける物的根拠は見つかっていないというのが現状である。

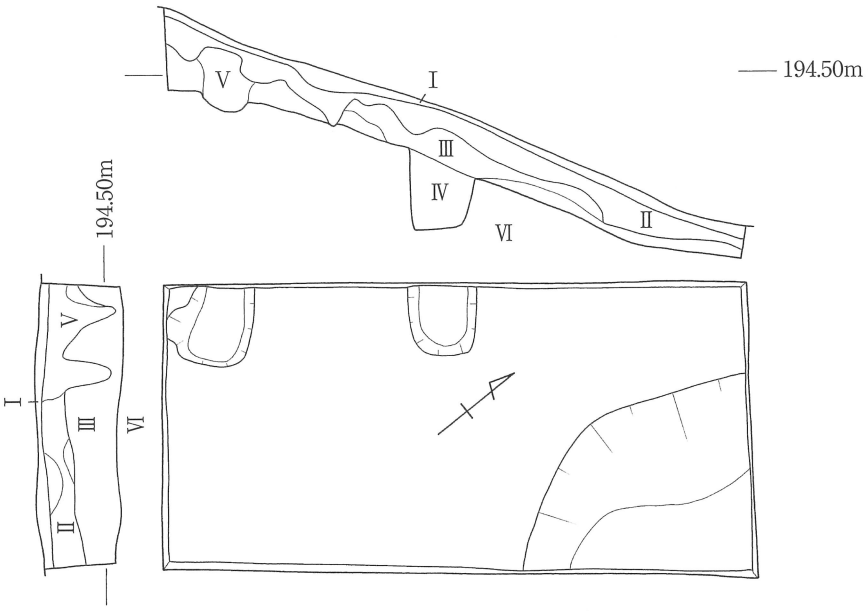
第７トレンチ（第５図１）　今回トレンチを設けた位置としては、最も標高の高い地点にあたり、２× 10 ｍの範囲を掘削調査した。掘削の結果、現表土から約２ｍ掘削したところで、地山層を検出した。予想以上に深いところでの地山検出となったが、土層断面の状況を検討したところ各層とも自然堆積であり、遺構・遺物は一切出土しなかった。ただ、地表下 0.8 ｍほどのところに炭片がややまとまって出土した。周辺を精査したものの他に遺物はなく、遺構に伴うものではないと判断した。

第８トレンチ（第５図２）　このトレンチは巡回路からやや奥まったところに設定したトレンチであり、今回設定したトレンチでは大正天皇多摩陵に最も近いところに位置する。トレンチを設けた場所は、南側に開けた平坦地であり、今回の調査地点では遺構・遺物の出土が予想されたところである。そのため３×８ｍ

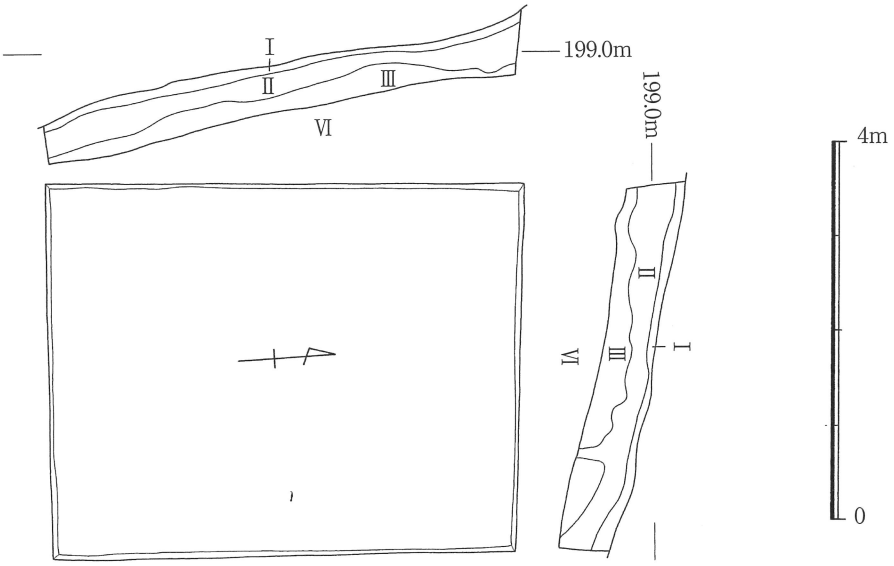
1　第1トレンチ




2　第2トレンチ

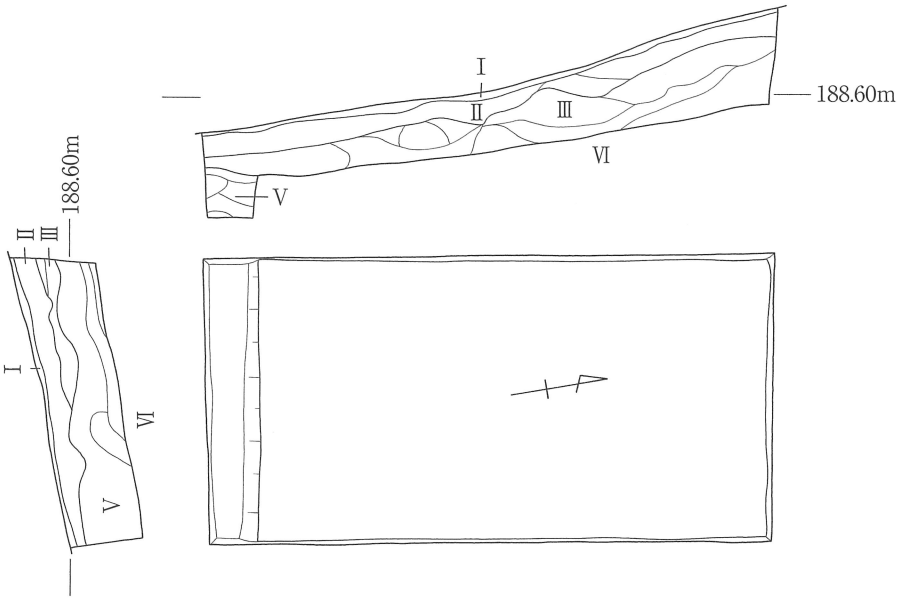



3　第3トレンチ

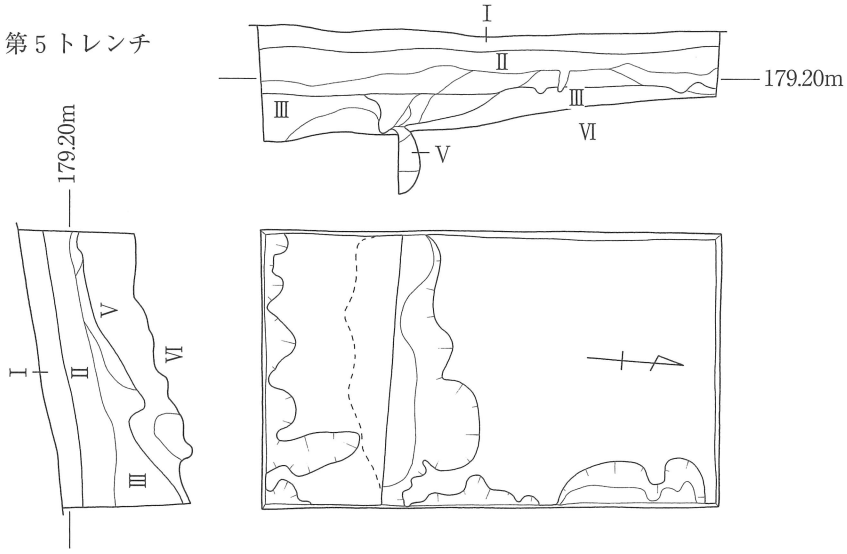



**第3図　武蔵陵墓地　D地区トレンチ平面図・断面図（1）（1/80）**

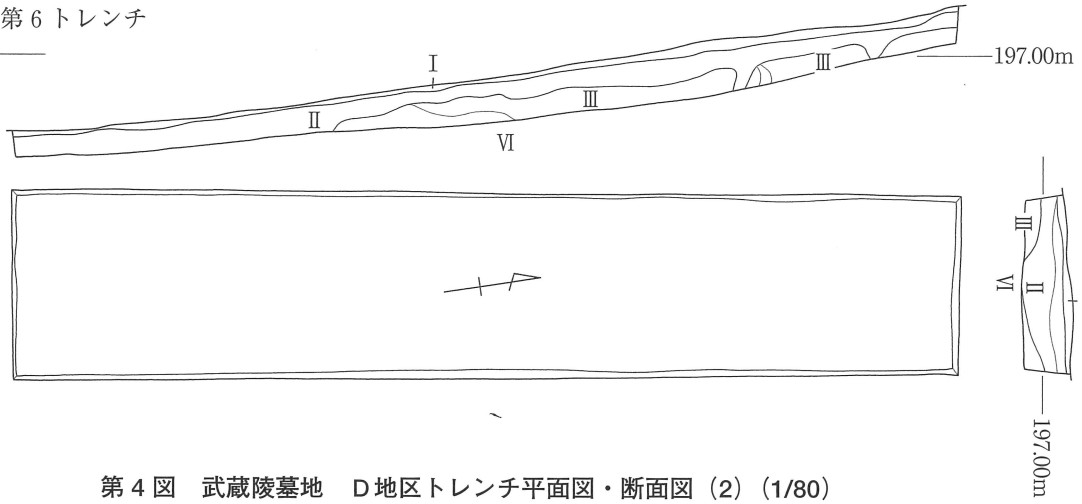
1　第４トレンチ




2　第５トレンチ

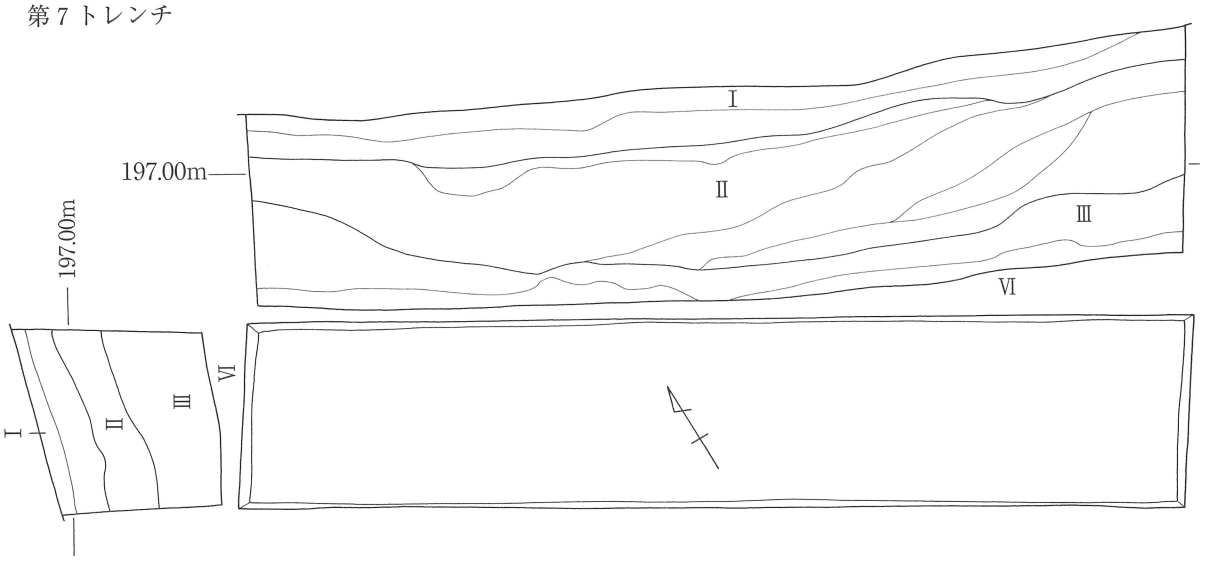


3　第６トレンチ

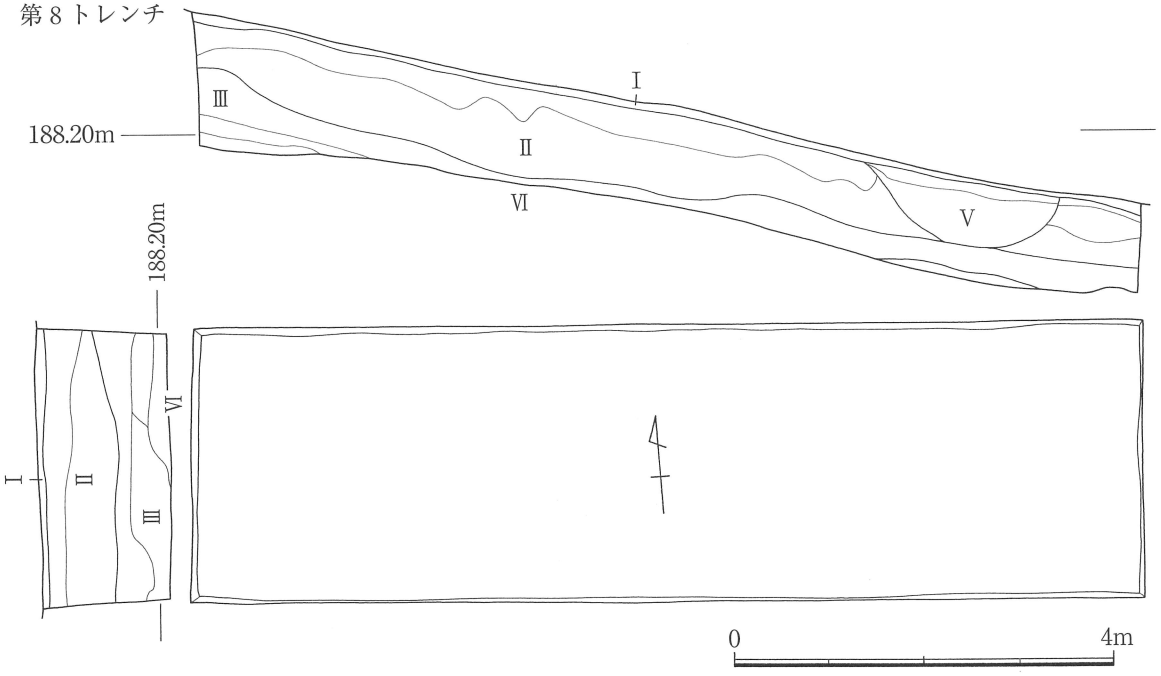



**第４図　武蔵陵墓地　Ｄ地区トレンチ平面図・断面図（2）（1/80）**

1　第７トレンチ




2　第８トレンチ

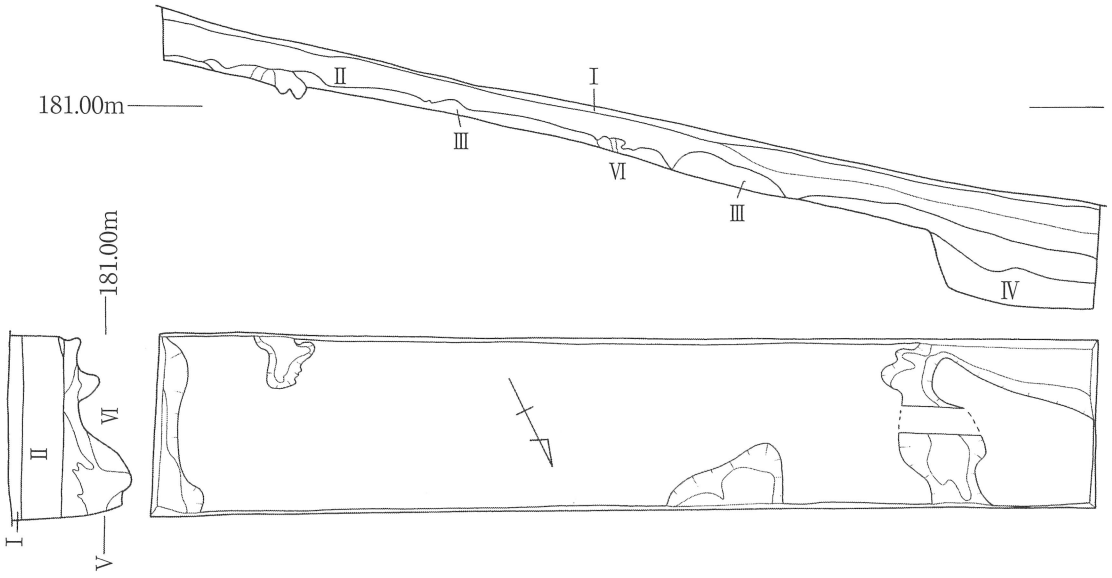



**第５図　武蔵陵墓地　Ｄ地区トレンチ平面図・断面図（3）（1/80）**

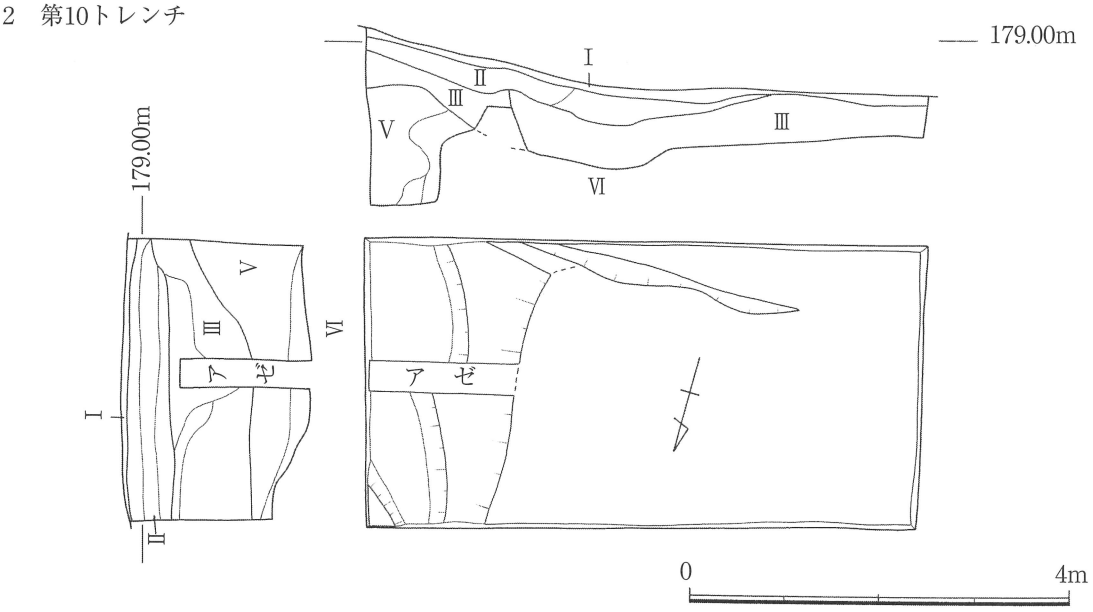
という、最も広い面積を掘削調査することとした。結果的には縄文時代に遡るような遺構・遺物は出土しなかった。むしろ、土層断面図に示したようにⅡ層を掘り込むような形で溝状の遺構が検出された。しかしながらこの土層からは明治期以降に属すると考えられる磁器の小破片が出土しており、層位的な判断からも古い時期に属するものではないと判断できる。先述したように大正天皇多摩陵に最も近い地点であることから、本陵の築陵時に今回トレンチを設定したあたりまで整地した可能性が考えられる。

第９トレンチ（第６図１）　第８トレンチから一段尾根を下ったところに設けたトレンチであり、第８トレンチに平行するように２×10ｍの範囲を掘削調査した。基本的には表土下0.5ｍほどでハードローム層に至るが、床面を精査したところ何カ所か黒色土を埋土とする落ち込みを検出した。各落ち込みを精査したところ、いずれも不整形な形状を示し人為的な遺構であるか否かの判断は難しい。ただ、トレンチ東端部の落ち込みからは磁器片が１点出土しており、遺構である場合でもそれほど古い時期に遡るものとは考えられ

1　第９トレンチ




2　第10トレンチ




**第６図　武蔵陵墓地　Ｄ地区トレンチ平面図・断面図（4）（1/80）**

ない。また、トレンチの南西隅では、立ち上がりの壁が比較的明瞭な溝状の掘り込みが検出された。湧水のため地山を検出することができなかったが、次に述べる第10トレンチで検出した溝状の落ち込みと埋土が共通しており、一連の遺構となる可能性も考えられる。しかしながら遺物はなにも出土せず、遺構とした場合の所属時期などの詳細は不明である。

第10トレンチ（第６図２）　第10トレンチは今回設定したトレンチの中では、最も標高の低い場所に設定した。また、大正天皇多摩陵の拝所から続く巡回路に面した場所であって、近くにはポンプ小屋などがあり、今回の調査区域の中では比較的後世に手が加わっている可能性が高い地点である。掘削した範囲は３×６ｍの範囲であり、基本的には0.5～0.6ｍの深さにおいて、地山のハードローム層に達した。トレンチの南側には一部攪乱された部分があり、ここからは土層断面図にも示したように針金・鉄板片を含む地層が確認された。

また、トレンチの東端では最大深度が約２ｍに達する溝状の掘り込みが検出された。この落ち込みの埋土は、茶褐色、もしくは暗茶褐色を呈する比較的締まりのある土層であり、一部赤色のスコリア粒を含んでいる。この埋土中から縄文土器と考えられる遺物が２点出土したが、特に集中して出土する状況ではない。この掘り込みが人為的なものであるか否か、また人為的なものとした場合にその所属時期はいつかという点については、トレンチが狭隘なこともあり確実なことを断定することはできない。縄文土器２点が出土していることを評価するか、また第９トレンチまで続いているかなどが今後の課題となろう。このトレンチを設定した現状の地形をあらためてみてみると、トレンチの東側（溝状の落ち込みが検出された側）では、急に立ち上がる低い崖状を呈しており人為的な感じを受ける。先述したようにこのトレンチ周辺は人の手が加わっていることは事実であるが、現状ではその性格時期については不明と言わざるを得ない。

**（２）小結**

以上、今回の調査概要を記述してきた。小結として調査成果と今後の課題についてまとめておきたい。今回の調査は大正天皇多摩陵の西側に拡がる丘陵部において、遺跡の有無を確認することを目的として10箇所にトレンチを設定し、合計約200㎡を発掘調査した。掘削の結果、明瞭な遺構は検出されず、前回の調査の「Ｂ地点」のように縄文土器が集中して出土するようなところもなかった。また、前回の調査で出土した弥生時代に属する遺物、平安時代の遺構・遺物は一切出土しなかった。

よって今回の調査地域まで遺跡が拡がっているとは考えられない状況ではあるが、不明瞭な落ち込みや、第９・10トレンチで検出された溝状の落ち込みの性格については今後の課題として残される。今回の調査で出土した明らかに時代が遡る遺物についても縄文土器２点・石器１点にとどまり、明瞭な遺構が検出されなかったこととよく合致した状況である。

## ２　Ａ地区の調査概要（第Ⅵ次調査）

Ａ地区は、武蔵陵墓地の総門を入ってすぐ北側一帯を指す。平成７年度の調査においては、谷部に４箇所のトレンチを設けて調査を行った。今回の第Ⅵ次調査では香淳皇后武蔵野東陵との間に伸びる尾根と、鎌倉街道に沿った地点にトレンチを設けた。また、通称「庵の山」と呼ばれる小丘陵の頂部と、その中腹にも２箇所のトレンチを配置した（第７図）。後者のトレンチについては、鈴木正三に関する遺構・遺物の出土が予想されたことから、江戸時代関係の遺構の拡がりを確認することを目的とした。調査箇所の基本的な層序は、Ｄ地区と同様である。

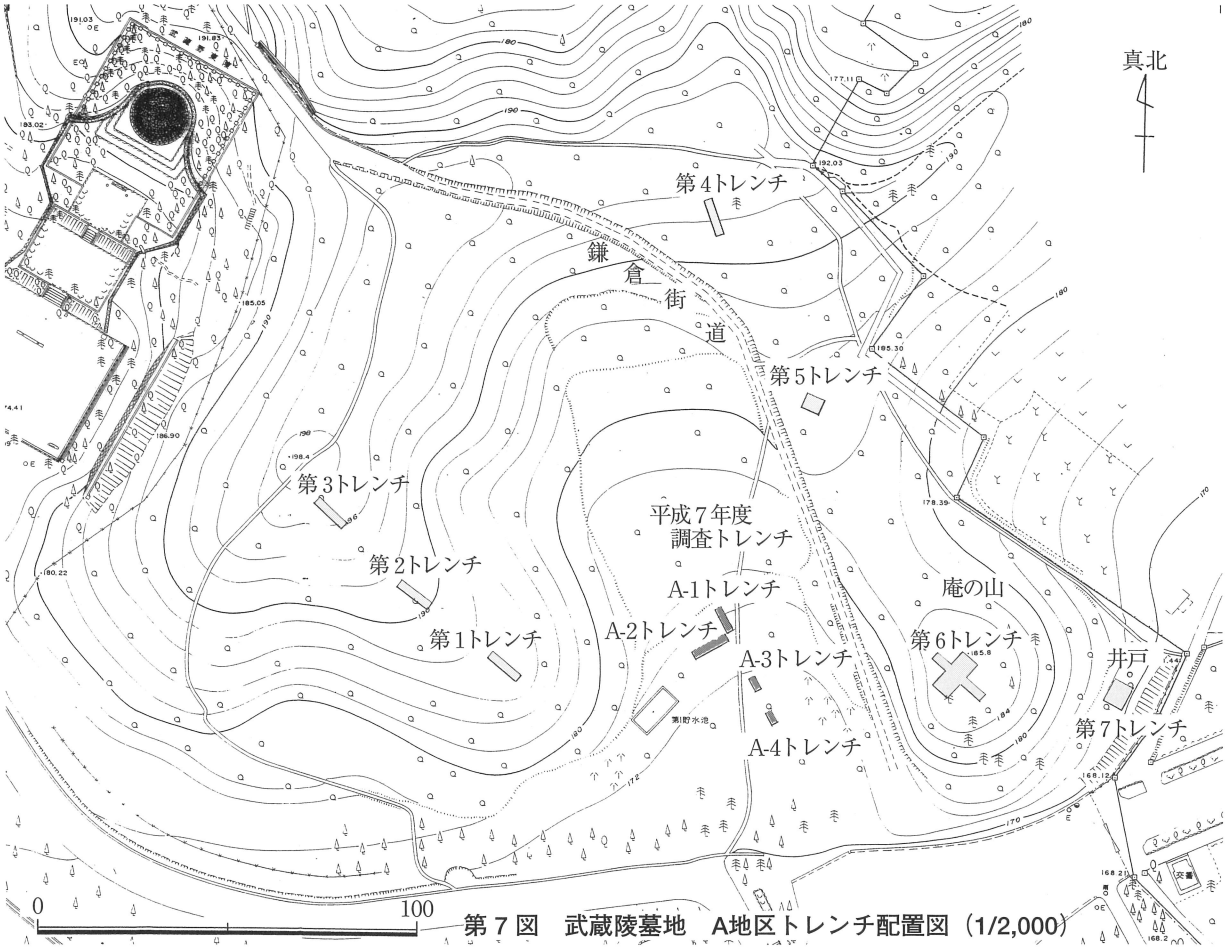
**（１）各トレンチの概要**

各トレンチの概要は、以下の通りである。

第１～３トレンチ（第８図１～３）　この３箇所のトレンチは、香淳皇后武蔵野東陵との間に伸びる尾根から東南の方向に舌状に延びる小尾根に配置した。大きさは、いずれも幅２ｍ、長さ１０ｍである。武蔵野東陵との間にある小丘は標高190ｍ弱を測り、この頂部から西側については第Ⅲ次調査の際にトレンチを設けて掘削した（トレンチ番号Ｂ－５・Ｂ－17）。結果的にはこれらのトレンチからは遺構・遺物は全く検出されず、Ｂ地区で検出されている、縄文・弥生時代の遺跡はこの尾根まで拡がっていないことが確認できた。

今回の調査でトレンチを設けた舌状の小尾根は、傾斜が西側に比べて緩やかなことと、南東に延びる尾根であることから日当たりもよいことから、遺構の有無を確認する目的で調査を実施したものである。その結果については、各トレンチの土層図を第８図に示したとおり全くの自然堆積であって、表土の下にソフトローム層が堆積しその直下にすぐ地山となる。遺物も全く出土せず、遺跡は拡がっていないものと判断した。

第４トレンチ（第９図１）　第４トレンチと第５トレンチはかつての鎌倉街道の一部を含む管理道路の東側に設定した。第４トレンチの現状は、杉が植林された鬱蒼とした林相の中にある。トレンチの大きさは幅２ｍ、長さ10ｍである。現在の地面傾斜とほぼ並行する角度で地山のローム層が検出され、土層図を示したように全くの自然堆積と考えられる。ただ、トレンチの床面には染み状に土色の違う部分が検出された。そのため土色の違う部分を掘削したが遺物も全く出土せず、人為的な遺構と判断するには躊躇するものであ




第７図　武蔵陵墓地　A地区トレンチ配置図（1/2,000）

り、木根等による土層の攪乱であると判断している。

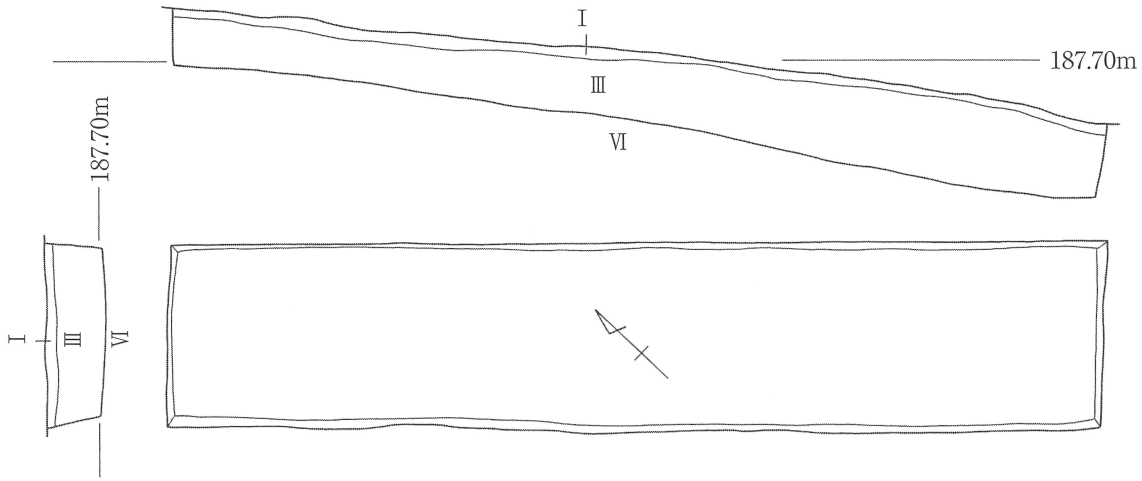
第５トレンチ（第９図２）　第５トレンチは、鎌倉街道の東側平坦面に設定した。現状は竹木が繁茂する雑木林となっているが、今回の調査箇所においては最も平坦な場所である。よって面的な調査が必要と考えたことから幅４ｍ、長さ５ｍのトレンチを設定した。他のトレンチと同様、表土と２次堆積のローム層を除去し地山面を検出したところで、遺構と判断できる土色の違う部分を検出した。

まず、トレンチの東側（図の下側）において、トレンチの1/3程の範囲が黒色土が若干混じる土質を呈したため、この部分の中央に土層観察用のアゼを残して掘削した。その結果、東側（トレンチの端）に向かって緩やかな落ち込みを示し、最も深いところで30cmほどの深度を測る。しかしながら遺物は全く出土せず土層にも変化が無いため、この落ち込みが人為的なものであるか否かの判断はできない。

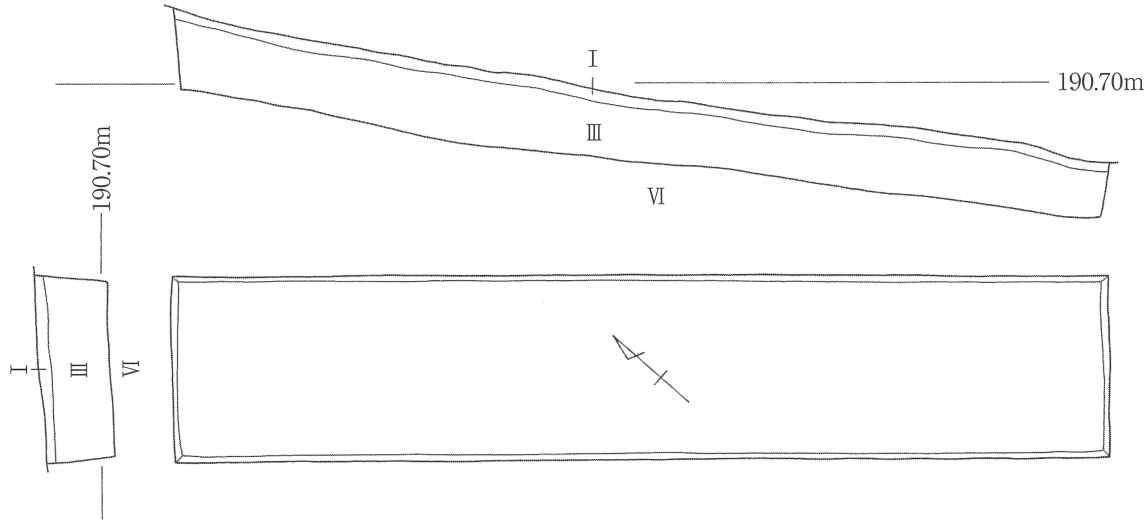
次にトレンチの西端（図の上側）で、直径１ｍ足らずの土坑が確認できた（土坑１）。ちょうどトレンチの壁にかかることからこの部分で土層観察することとし、全体を掘削した。土坑の埋土は比較的しっかりと締まった暗茶褐色土であり、深度は約80cmほどを測る。土坑の形状も隅丸方形を呈し、縄文時代の遺構の可能性も考えられる。遺物は全く出土しておらず、縄文時代の遺構とすれば落とし穴のような性格を持つ遺構となろう。

続いてトレンチのほぼ中央において、直径70cmほどの焼土を伴う土坑を検出した（土坑２）。検出した状況において、土坑の中心部分は黒色土が拡がりその周囲に赤く焼けた土が確認できた。この土坑の性格を見極めるために東側を半裁したところ（今回の調査で検出した遺構については、遺跡の存否を確認することを目的とした調査であることから完掘はせず、すべて半裁にとどめることとした）、黒色土をわずかに除去した時点で拳大の礫（川原石のような円礫ではなく、角礫に近い石材）が不規則に投げ込まれたような状況で出土した。この礫を除去すると焼土が確認され、土坑の最大深度は20cmほどを測る。遺物は全く出土せ

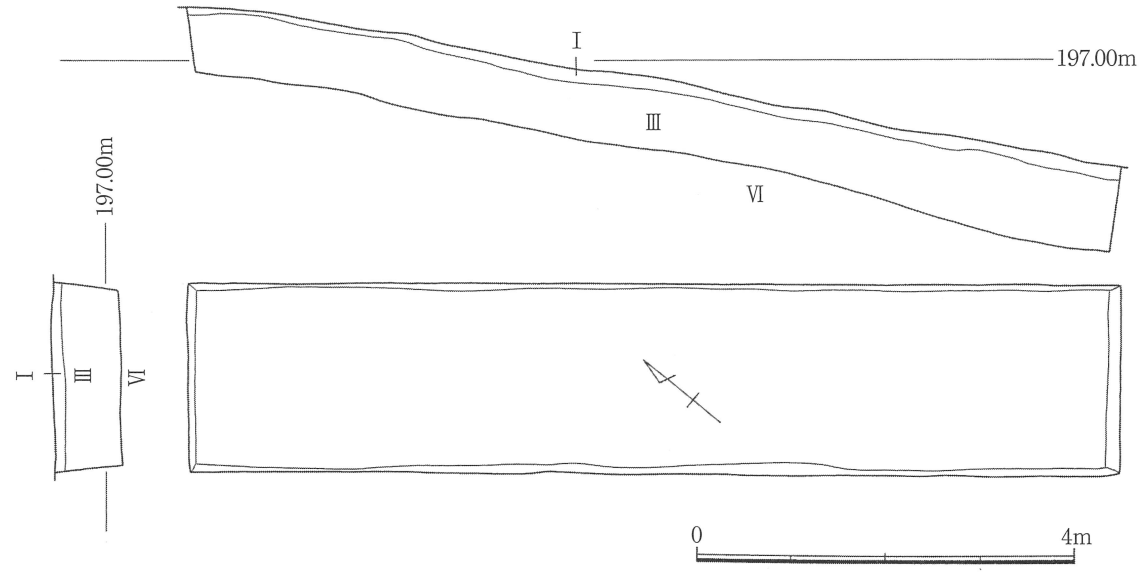
1　第1トレンチ




2　第2トレンチ

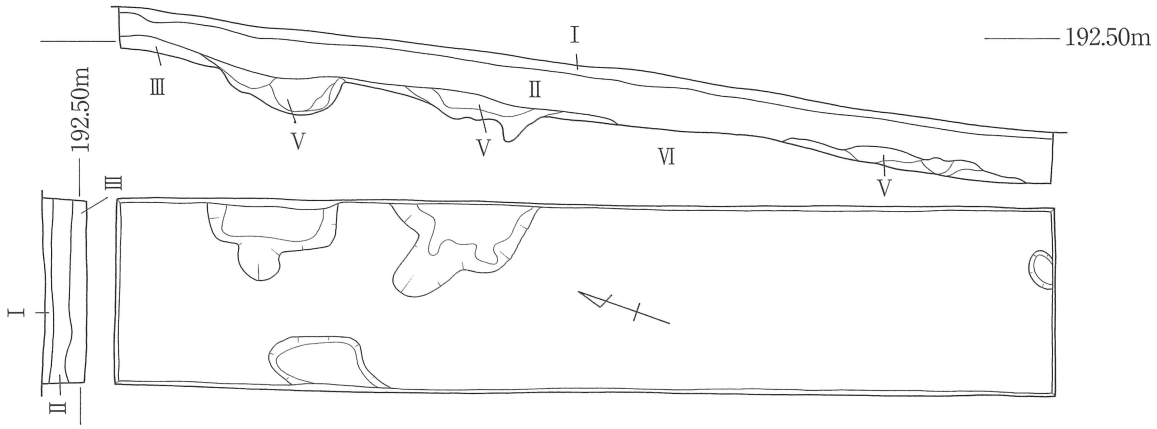



3　第3トレンチ

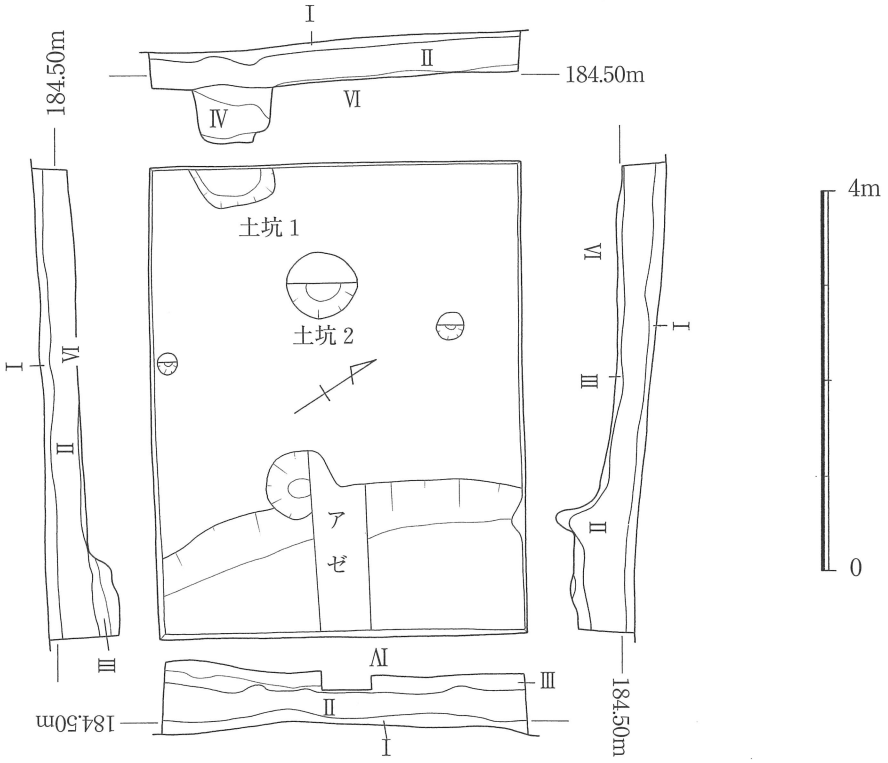



**第8図　武蔵陵墓地　A地区トレンチ平面図・断面図（1）（1/80）**

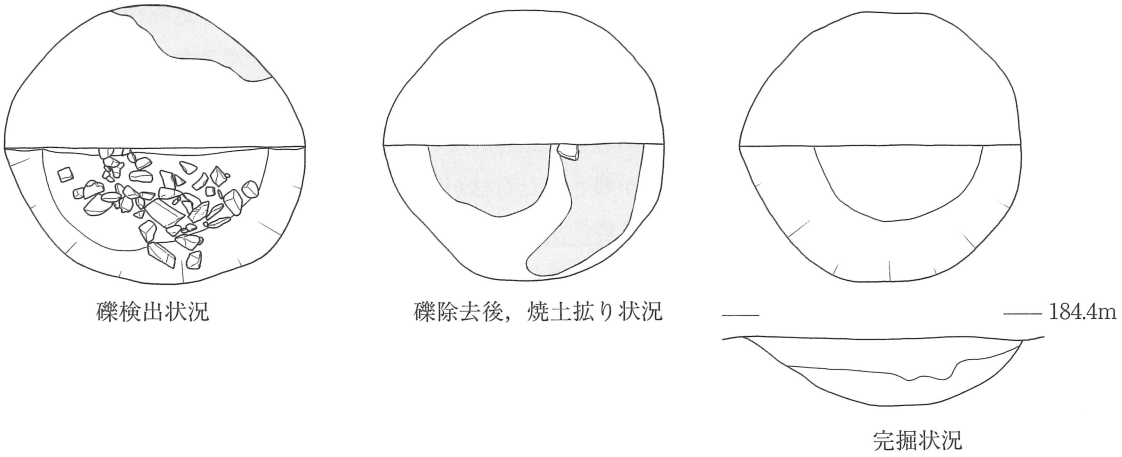
1　第４トレンチ




2　第５トレンチ




土坑２　詳細図（1／20）網かけ部分は焼土




礫検出状況　　礫除去後，焼土拡り状況　　完掘状況

**第９図　武蔵陵墓地　Ａ地区トレンチ平面図・断面図（2）（1/80）**

ず、この遺構の所属年代を決める根拠を欠く。結果的には土坑１と同じ面で検出することとなったが、土坑２の埋土は土坑１に比べ軟質であることから、同時期であるという確信は持てない。

この土坑２から1.5ｍ程離れて直径30cm程のピット状の掘り込みが検出された。トレンチ南壁近くで検出された土坑は、深さ20cmほどであり、土坑２の北側で検出された土坑は深さ25cmほどである。この２箇所のピット状の掘り込みを柱穴と考えれば、土坑２を炉とすることによって簡易な住居状の施設の存在を予想することも可能とは考えるが断定するまでの確証はもてない。

以上、この第５トレンチでは土坑２基をはじめとする遺構を検出したが遺物は出土せず、遺構の所属時期・性格を明らかにすることはできなかった。

第６トレンチ（第10図）　第６トレンチは武蔵陵墓地の正門北側にある、通称「庵の山」と呼ばれている小丘陵の頂部に設定した。この場所は陵墓地となる以前において、後述する鈴木正三（石平道人とも呼称されるが、本報告では鈴木正三と表記する）に関連する石碑があったことが伝えられており、表土直下に遺構が存在する可能性が高いと判断された。よって、樹木を避けつつなるべく広い範囲にトレンチが及ぶように東西に12×５ｍ、南北に17×２ｍのトレンチを十文字に配置した。

予想通り厚さ10cmほどの表土を除去した面において、以下のような遺構が検出されたので北から順に詳述していく。

**集石１**　トレンチの北端において西壁に接して検出された遺構であり、拳大から人頭大の川原石が10個ほど集められた状態で検出された。明らかに人為的にこの場所へ持ち込まれた石であり、また集め置かれたものであると判断できるが、何らかの遺構になるものか、不要な石材を集めて置いたものかの判断は付かない。石をいくつか除去し、下に土坑の有無を精査したが、他に遺構は伴っていなかった。また、この集石に伴う遺物は何も存在していない。

**板石**　集石１から南に1.5m程離れて、長辺60cm（２尺）、短辺30cm（１尺）、厚さ4.5cm（１寸５分）の板石が２枚並べた状態で検出された。また、やや離れたところに同じ材質の石材片が検出された。この板石の表面には加工痕が明瞭に残されており、きれいに磨かれたものではない。この状況から判断すると、石塔の台座のような用途が最も適当であろう。２枚がきれいに並んだ状況であることから、恐らく原位置を保っているものと思われるが、三角形を呈する小破片が存在することから、他にも板石が存在する可能性も高い。なお、念のためこの板石の下に土坑等の遺構が伴っていないか否かを確認したが、何も検出されなかった。この板石に伴うような遺物は存在していない。

**集石２**　集石１のようなまとまりはなく、２ｍ四方のなかに拳大ほどの石が点在していた。石材も川原石だけでなく、角礫もわずかではあるが混じっていた。トレンチの他の場所にはこのような石材が点在していないことから、一応遺構として取り扱ったが用途は明らかではなく、遺物も出土していない。

**土坑１・２**　先述の集石２を一部除去し、東側トレンチと呼称したサブトレンチを掘削した際、２基の土坑の存在が確認された。土層断面図からも明らかなように、集石２と同じ面から掘り込みがなされている。しかしながら集石２との関係は明瞭ではなく、上面において平面プランの検出はできなかった。よって土層断面によって確認したところ、土坑２の後に土坑１が掘り込まれているものと判断したが、土質（締まり具合と土色）から判断するとそれほど時間差があるとは思われない。

土坑１の底面近くから漆喰状の白い付着物が残された石材が数個出土した。これらの石材の用途については明らかではないが、石塔の部材に関連する可能性が高い。すなわちこの土坑の性格を考えた時、後述するように本地が陵墓地に取り込まれ、それまでこの場所に置かれたあった数基の石塔を現在の場所に移転したが、その際に不要となった石材を、穴を掘って廃棄したものであろうと考えている。この土坑に伴う遺物は他にはなく、集石２付近からはガラス瓶の破片が多数出土した。このガラス瓶については製造年月日を明らかにするような手がかりはなかったが、先述した石塔移築の際に残された可能性も考えられる。以上のような状況から、集石２、土坑１・２とも江戸時代に遡るような遺構ではないと考えられる。

**集石土坑**　東西トレンチのほぼ中央付近において、長軸2.0m、短軸1.3m程の楕円状を示す土坑が検出さ

第６トレンチ

185.00m

北側トレンチ

集石１

185.00m

185.00m

板石

185.00m

土坑２

土坑１

集石２

東側トレンチ

西側トレンチ

集石土坑

185.00m

焼土

185.00m

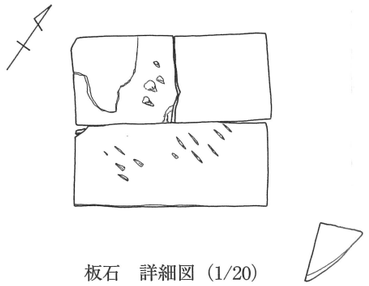
185.00m

4m

0

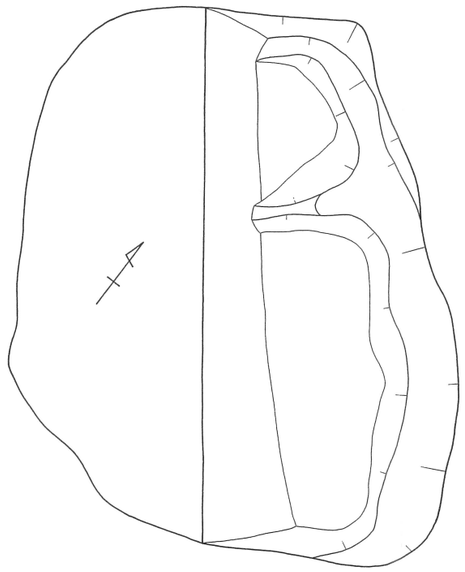
南側トレンチ

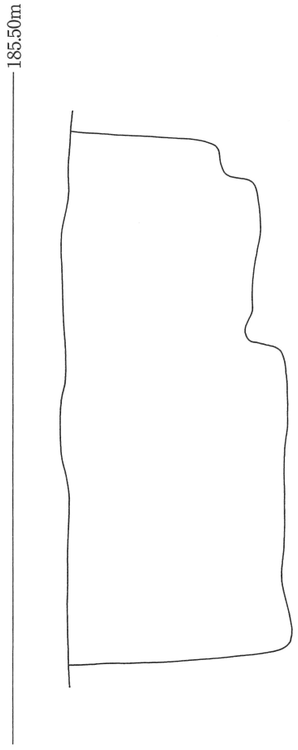
185.00m



板石　詳細図（1/20）

集石１　詳細図（1/20）





集石土坑　詳細図（1/20）

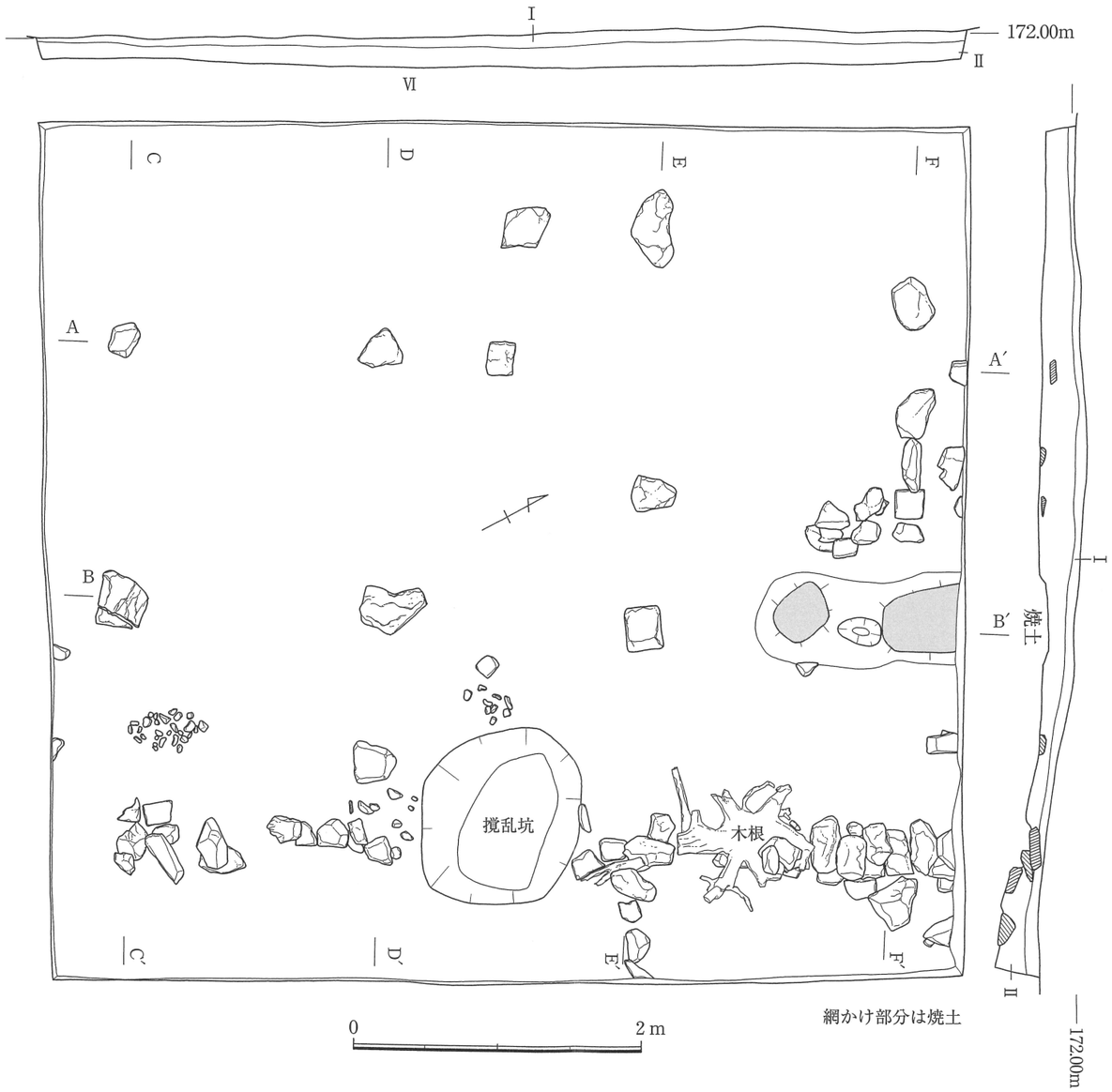
185.50m

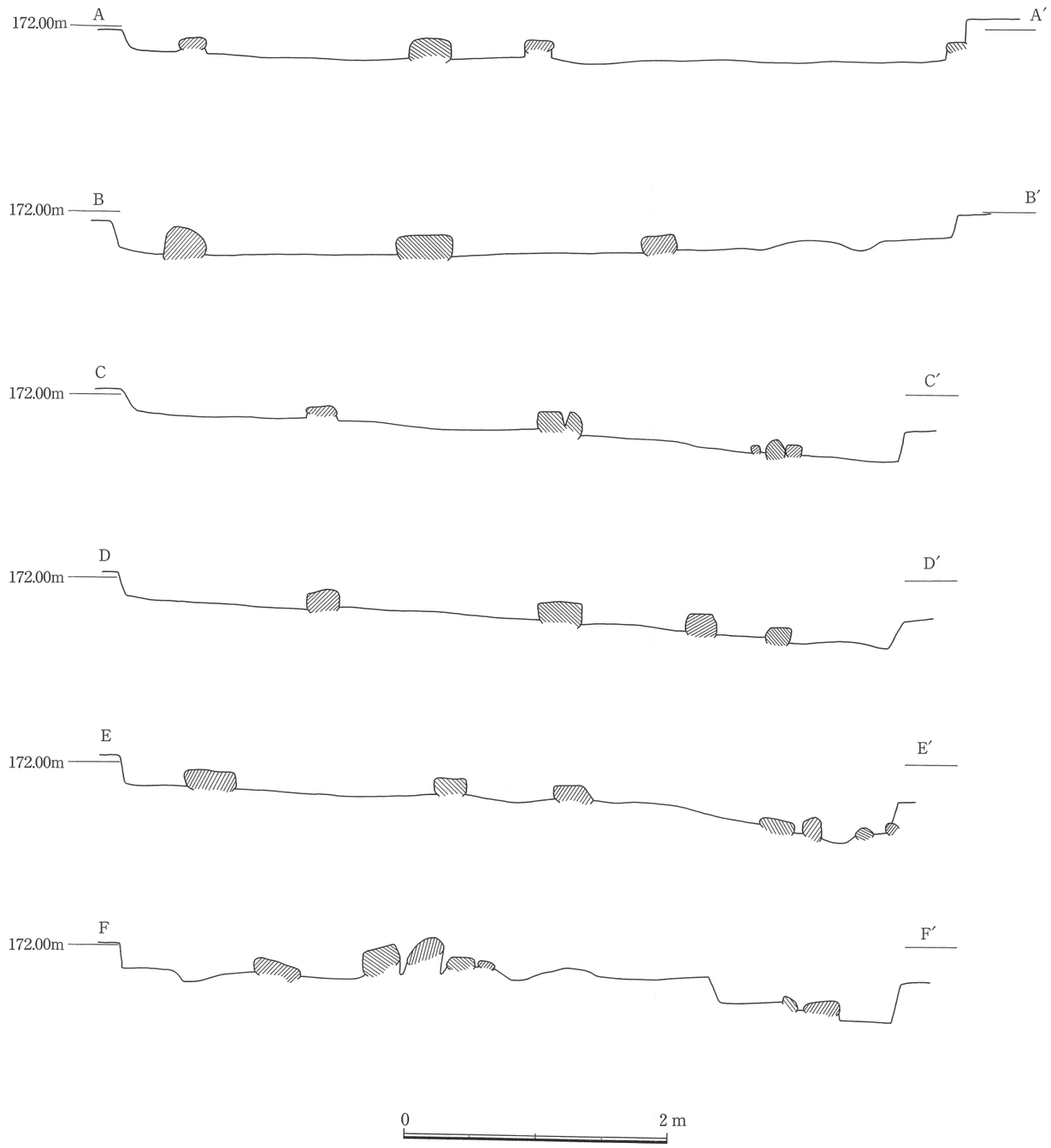
0

1m

**第10図　武蔵陵墓地**
**A地区トレンチ平面図・断面図（3）（1/80）**

第７トレンチ




**第11図　武蔵陵墓地　A地区トレンチ平面図・断面図（4）（1/40）**

れた。図版15－2に示したように検出された面において直径3～5cm・厚さ1cmほどの扁平な川原石が多数認められた。よって土坑を半裁し東側を掘削したところ、土坑はほとんどが扁平な石材によって埋められていた。埋土と呼べるほどの土もなく、底から上面に至るまで均質な状態でこの扁平な石が詰まっていた。遺物は出土せず、床面は北側がやや浅く、南側が深く掘り込まれていた。遺構の性格は全く不明であり、遺物も出土しなかった。可能性が考えられる遺構としては、扁平な石に経文を一字ずつ記した「一字一石経」の埋納遺構が考えられたため出土した扁平な石を1点1点確認したが、少なくとも肉眼では文字は観察されなかった。この掘り出した石材は確認後土嚢に積めて埋め戻しに使用し、一部はサンプルとして持ち帰っている。同様の遺構の検出例があれば、ご教示を願いたい。

以上のように遺構の性格としては不明であるが、この場所は石塔が建てられていたように、鈴木正三に関連する聖なる場所として江戸時代には認識されていたところと考えられる。この遺構も他の遺構と同じ面から掘り込まれていることを考えると同時期であると判断でき、何らかの宗教的な意味合いを持った遺構であろうと考えることができよう。なお、掘削をしなかった西半分の上面において、明らかに加工された長さ30cm、直径2cmほどの棒状の木製品が出土した。しかしながら両端部の切断状況、表面の状況とも機械的な加工であり、江戸時代まで遡るような資料ではないと判断した。

**焼土**　集石土坑から少し離れた場所において、直径50cmほどの土が焼けた部分を検出した。明らかに人為的な焼土であり、半裁して焼土の厚みなどを確認した。結果的には焼けた土はごく浅いものであり、表面に認められた数cmのみであった。炭もほとんど出土せず、長期にわたってこの場所で火を焚いた痕跡ではないと考えられる。先述したようにこの場所は、江戸時代以来陵墓地になるまでそれなりに聖地であったと考えられ、むやみにたき火をするような場所ではなかったと考えられる。この焼土が形成された時期については江戸時代に遡るものか、石塔移転時のものかは判然としない。

以上、第6トレンチにおいて検出された遺構について詳述してきた。遺物がほとんど無く時期を確定することは困難であるが、これらの遺構が後述する鈴木正三の石塔に関するものであることは確かであろう。よってこの場所が周知の遺跡となり、今後開発される可能性が極めて低いものであることから、これらの遺構を除去し地山までの掘削を行うことはしなかった。また、第5トレンチで検出した遺構と同様であるが、遺構はすべて半分を掘削したにとどめ、検出した遺構は土嚢などで保護した上で埋め戻した。そのため、地山までの深度と江戸時代を遡る遺構・遺物の確認のため、トレンチの東西南北において幅1mをサブトレンチとして地山まで掘削した。その結果は、土層断面図に示したように60cmほどで地山に至り、土層の堆積状況も各サブトレンチとも共通していた。よって江戸時代を遡るような遺構は存在しない可能性が高いが、南トレンチの地山直上で第13図1に示した縄文土器1点が出土した。出土した付近を精査したものの他に縄文土器などの遺物はなく、この土器をどのように解釈すればよいか正直苦慮するところであるが、1点のみの単独出土であることから、付近に縄文時代に遡る大規模な遺構は存在しないであろうと判断した。

第7トレンチ（第11図）　第6トレンチを南側に下った平坦面に設定したトレンチであり、最終的には6.5×6.0mを発掘した。今回調査した場所については平坦地であり、井戸があることは知られていた。よって従来から職員の巡回時には注意するようにと伝えられてきたところであるが、この井戸が後述する堅叔庵に伴うものであるという認識は持っていなかった。すなわちこの場所が陵墓地に取り入れられた時点において、堅叔庵の存在はほとんど忘れられていたと考えられる。今回第6トレンチにおいて、第12図に示した『武蔵名所図絵』のとおり石塔が存在した可能性が高まったことから、この井戸が堅叔庵に伴うものであることが想起された。よって、井戸の東に拡がる平坦面において、幅1m、長さ5mを掘削した。その結果、表土直下において礎石と考えられる石材が出土したことから、前述した範囲に拡大して建物の全容を把握することに努めた。結果的には、第11図に示したような礎石を検出した。以下、『武蔵名所図絵』に示された絵図と比較しながらこの堅叔庵の建物を復元していきたい。

まず絵図を見ると南側に縁側があり、その中央に沓脱石と思われるものが見える。現状ではトレンチの南側は急坂となり、その下は境界外であり都道が走っている。これはこの道路を取り付ける際に丘陵の一部が

削られたものと思われ、そのためか沓脱石は検出されていない。また、井戸から東に延びる通路部分も現状ではかなり短くなっており、この部分も道路の取り付けに伴って削られたと思われる。トレンチで検出された建物の南端は、礎石ではなく川原石が２～３段ほど積み上げられている。途中木根によって石列が乱れ、またほぼ中央には直径約１ｍを測る大きな攪乱坑があり（この攪乱坑については検出面から1.5ｍほどを掘削したが、地山には至らず掘削を中止した。埋土は全く締まりのない黄褐色土であり、ごく小さな磁器片が１点出土しただけであり、時期・性格は不明である）、一部破壊されているものの、この石列が建物の南端と判断した。

第12図　『武蔵名勝図会』所載「堅叔庵」絵図

次に入り口については、絵図によると井戸の向かいにあることがわかる。すなわち東向きの出入り口となるが、検出された遺構ではトレンチの東端において２つ連結した形で検出された焼土と、南側の石列の間の約90cm（半間）の幅を測る部分が入り口に相当するものと考えられる。ちなみにこの２箇所の焼土が台所機能を果たした場所であると考えるが、竈のような設備の痕跡は認められない。

次に建物の本体構造であるが、検出した礎石を見る限り東西３間、南北２間に北側に１間半と半間の張り出し部分が取り付く構造に復元できる。絵図では南側の縁側を支える柱は５本と、入り口に繋がる東端の柱を含めて６本となる。すなわちこの柱が半間おきにあるとすれば東西は２間半の建物となる。

次に南北であるが、これは絵図の角度からは明瞭でない。しかし縁側の奥に畳敷き、あるいは板の間であるかも知れないが、中央に１本の線描きを認めることができ、少なくとも２間程度の奥行きは存在すると考えられる。そして入り口の奥には張り出し部と思われるような、絵図では白抜きに表現された建物部分が見える。これが礎石で確認できた１間半、半間の張り出し部にあたる部分であろうと想像するものである。このように見てくると、建物南側の基礎構造が異なるが、ほぼ絵図に描かれた建物跡が検出されたものと考えている。

しかしながら『武蔵名所図絵』とほぼ同じ頃に作られた『新編武蔵風土記稿』には庵の建物について「庵は六間半に三間南向」とあり、南向きであることは一致するものの建物の大きさは合わない。現在の平坦面の広さから考えて、６間半の建物が建つスペースはやや難しいのではないかと思われる。そこで念のため掘削しなかった部分については、ボーリング棒による試錐調査を行ったが、トレンチの西側において礎石らしい感触は得られなかった。

以上、第７トレンチで検出された礎石建物について詳述してきたが、この建物が『武蔵名所図絵』にある堅叔庵であることはまず間違いがないと判断するものである。この庵と鈴木正三については出土した遺物を記述した後、最後のまとめで再度触れることとしたい。

**（２）小結**

以上、平成17年度に実施した、Ａ地区の各トレンチの概要を記述してきた。この調査では前回（平成７

年度）においては谷部のみにトレンチを配置したことから、周囲の丘陵部における遺構・遺物の確認を目的としたものである。谷部の西側にある、香淳皇后武蔵野東陵を挟む尾根に設定した第１～３トレンチには全く自然堆積の土層のみであり、遺物も出土しなかった。前回調査したトレンチからはわずかに縄文土器が出土したが、縄文時代の遺構の存在ははっきりしていない。今回の所見を踏まえると、この付近に大規模な縄文時代の遺構が拡がっているとは考えられない状況である。

一方、鎌倉街道の東側に設定したトレンチでは遺構・遺物が出土した。第４トレンチでは人為的な遺構と判断してよいかどうか不明なところもあるが、第５トレンチでは明らかに人為的な焼土坑が検出された。また、第６・７トレンチでは鈴木正三に関連する遺構が検出され、これまで場所が明確にできなかった堅叔庵の位置が特定できたことは大きな成果であろう。

## ３　出土遺物

本節では、平成16年度・17年度に出土した遺物を併せて報告することとしたい。出土した遺物は縄文時代に属するものと、堅叔庵に伴う江戸時代の遺物に大別でき、他の時期に所属する遺物は出土していない。よって、この２時期に分けて記述することとしたい。

**（１）縄文時代遺物**（第13図１～３）

縄文土器は図化できたもの２点と、小片１点の３点が出土している。そのうち１は平成17年度に調査したＡ地区第６トレンチから出土したものである。表面には明瞭に縄文痕が認められ、胎土には多量の金雲母が含まれている。２は平成16年度に調査したＤ地区第10トレンチから出土したものである。器厚と同じほどの高さを測る突帯が貼り付けられており、その上面には刻み目が観察できる。同様の刻み目が上端にも見られることから、口縁に近い部位の破片であろうと思われる。この土器片の胎土にも金雲母が認められ、出土した地点は異なるもののどちらも縄文中期に属する可能性が高いと考えられる。

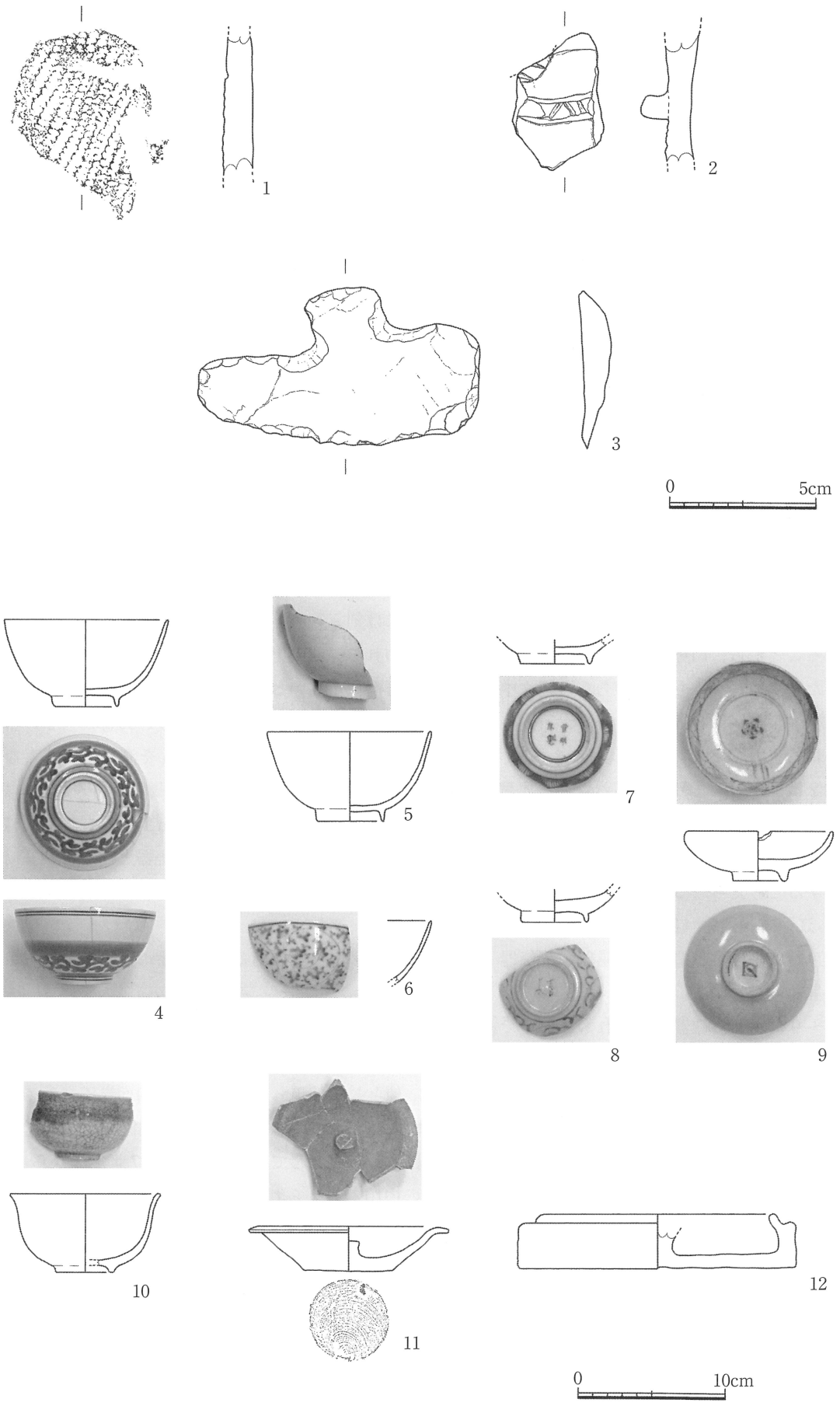
石器はＤ地区第５トレンチから、石匙１点のみが出土した。石材は砂岩製であり、刃部がつまみ部に直行する横形を呈するものである。大きさは、長さ（縦）5.3cm・幅9.5cm・厚1.0cmを測る。刃部となる下端には２次加工があまり認められない。本個体と同様の砂岩製で横形の石匙は、武蔵陵墓地の北方約２kmほどのところに位置する小田野遺跡からも出土しており（註１）、この地域一帯で出土するものと同様の形状を示す。この石匙の所属する時期としては、石材の風化具合なども勘案すると、土器と同じく縄文時代中期に属すると考えられる。

**（２）江戸時代遺物**（第13図４～12・第14図13～23）

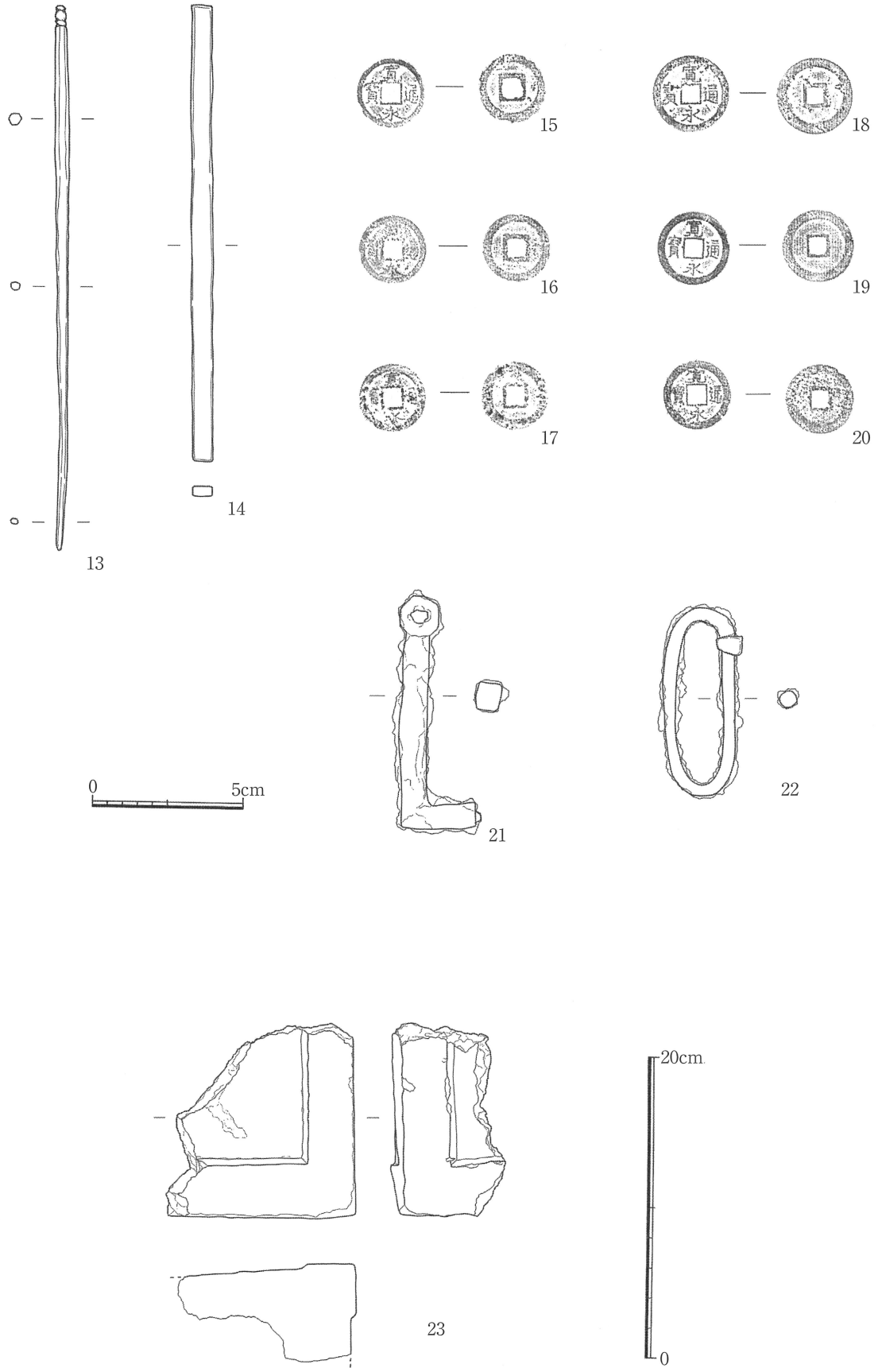
江戸時代に属する遺物は陶磁器・土師器・青銅製品・鉄製品などがあるが、石塔の部材と考えられる石材片も併せて報告する。

４～９に示した磁器はいずれも肥前産であり、４は唐草文で飾られている。７・８の高台内側にはそれぞれ「宣明年製」と「大明年製」の銘が見られる。９は染付け青磁であり、本来椀の蓋であるが、一部に打ち欠きがあり、灯明皿として使用したことが窺われる。椀として使用した時に天井部内面に五弁花のこんにゃく印判による文様が見られ、高台つまみの内側には「福」の銘がある。10は瀬戸美濃産の陶器であり、表面には細かな貫入が見られる。これらの陶磁器が所属する年代としては、４～８が17世紀末から18世紀初頭にかけての所産であり、一方、９・10は18世紀の中頃と考えられる。土師器は11が内面につまみのある蓋であり、底面には回転糸切り痕を残す。12は、中央の灯明皿を載せる部分が欠損しているが、瓦燈の身であると考えられる。この瓦燈は江戸在地の産であり、９の染付け青磁と同じ頃に製作されたと考えられる。

13・14は青銅製品であるが、13は長さ18cmほどを測り、上端には丸く加工され、断面が多角形を呈する。下端に行くにつれ、断面は円形となり細くなる。このような形状から、１本しか出土しなかったが火箸としての用途が最も妥当であろうと考える。14は長さ15cmを測る、断面長方形の青銅製の棒である。用途は不明である。15～20は寛永通宝である。いずれも新寛永と呼ばれるものであり、裏面には「文」の文




第13図　武蔵陵墓地　出土品実測図　縄文土器・石器（1/2）　陶磁器（1/4）




第14図　武蔵陵墓地　出土品実測図　金属製品（1/2）　石製品（1/4）

字は鋳出されていない。

21・22は鉄製品である。21は断面が方形を呈し、多角形を呈する頭部の中央には穴が穿たれており、先端は2cmほどが直角に曲げられている。用途は不明であるが、何らかの留金具であろうか。22も用途不明の鉄製品であり、断面円形の鉄棒を楕円状に加工している。一部に別の鉄片が巻き付けられているが、用途は不明である。

23は、A地区第6トレンチで出土した石塔の部材であり、このトレンチからは図化はできなかったが、他にも石塔の部材と考えられる加工した石材の小片も出土している。ここに図化した部材は、最大長12cmほどの破片であるが、2面に方形の幅3cmほどの縁取りが認められることから、関東型宝篋印塔の基礎部分にあたる可能性が高い。石材は砂岩質であり、内面には粗彫りの痕跡がそのまま残る。第6トレンチを設定した「庵の山」の頂部には、この場所が陵墓地に取り込まれるまでは石塔があったことが伝えられているが、遺構のところで詳述したように石塔の台座と思われる板石が検出され、このような石塔の部材と考えられる石材が出土したことから、ここに石塔があったことは確実といえる。また、宝篋印塔の部材と考えられる石材が出土したことから、『武蔵名所図絵』に描かれている以外の石塔もこの場所に存在していた可能性も考えられる。

### （3）小結

以上、平成16・17年度の調査によって出土した遺物について述べてきた。縄文時代遺物としては図化できたものが土器が2点と石匙が1点のみであり、しかもすべて別々のトレンチから出土している。いずれも中期に属する遺物であると考えるが、まとまった量が出土したわけではなく遺構に伴ったものではない。よって、B・C地区で検出した縄文時代の遺跡が今回の調査地域にまでは拡がっていない可能性が高いと考えられる。しかし第Ⅲ次調査においても金雲母を多量に含む土器は出土していることから、今回出土した土器についても著しく異なった土器が出土したものではないことも事実であり、今後とも遺跡の拡がりには注意しておく必要はあろう。

次に江戸時代期の遺物については、その大半が堅叔庵跡から出土したものである。陶磁器の編年観によれば17世紀末から18世紀初頭に位置付けられる資料と、やや時間をおいた18世紀中頃と考えられる磁器の遺物がある。この時間差を、堅叔庵の利用期間においてどのように解釈するかについては後述する。いずれにせよこの時期の陶磁器としては比較的質のよい資料がまとまって出土しているものと考えられ、この時期における多摩地域の一般農村から出土するものとは様相を異にする。このことは堅叔庵の性格を考える上で重要な視点であろう。

その他、前回B地区で出土した弥生時代、あるいは平安時代の遺物は全く出土せず、この時期の遺構の拡がりは極めて狭いものであると考えられる。

## まとめ

これまで平成16・17年度に実施した調査について、遺構と遺物の概要を記述してきた。最後に今回の調査で検出された堅叔庵についてまとめておく。

堅叔庵は、この地の居住した豪農井上出羽が鈴木正三（以下、正三と表記する）に帰依し、寄進した庵である。正三は天正7年（1579）に現在の愛知県豊田市（旧東加茂郡足助町）に出生し、徳川家康に仕える旗本の1人として関ヶ原の戦いや大阪夏の陣で活躍する。その後元和6年（1620）に42歳という年齢で出家し、明暦元年（1655）に77歳で逝去する。平成17年（2005）は没後350年ということもあり地元豊田市では「鈴木正三－その人と心－」と題された特別展が催されるなど、江戸時代初期の僧侶、あるいは思想家として著名である（註2）。それゆえ正三の思想や活動については多くの研究書があるので、今回は堅叔庵についてのみ触れることとする（註3）。

さて、正三の年譜によると江戸へ下向した時期としては、慶安元年（1648）頃と伝えられ、正三が70歳の最晩年になってからである。その後逝去するまで江戸を中心に活躍するが、その拠点は牛込にある天徳院

であり、そのなかにある了心庵に居住し、最後は駿河台鈴木町にあった弟重之の屋敷で逝去したという。すなわちこの堅叔庵にどれほど正三が滞在したかは明らかではないが、逝去までの年月を勘案するとそれほど長い期間逗留したとは思われない。『武蔵名所図絵』には「この地は道人終焉の地なるべし」とあるがこれは明らかに誤記であり、また庵の裏山に正三の墳墓として記される石塔も、墓ではなく供養塔と考えるべきものである。

この正三を招いた井上出羽の子孫は、現在までも同地において代々続いており、この「庵の山」を含む一帯は、現当主の先々代の時代に井上家から宮内省が買い上げたものである。この時に山の頂上にあった石塔は現在の場所、すなわち井上家の菩提寺である長泉寺の横に移された。この移転は大正天皇の崩御後、極めて短期間でなされた突貫工事であったことが知られており、第6トレンチで検出された石材を廃棄した土坑や、石材の土台であると考えられる板石が残されている状況からも窺えることができる。いずれにせよ堅叔庵と正三については、井上家が強く関与していることは間違いないが、井上家に残されていた史料類は、明治年間の大火によって失われており詳細は不明である。

この堅叔庵については、これまでにも引用してきたが『武蔵名所図絵』や『新編武蔵風土記稿』に江戸後期の状況が記述されている。これらの書物は千人同心として著名な植田孟縉が編集したものであり、前者は文政6年（1823）に昌平黌に献上され、後者は文政9年（1826）に完成している。ほぼ同時期に調査され、編纂されたと考えて支障がないが、この時期には第12図に示したような庵が存在していたと考えられる。

そこで出土した遺物の時期から、この堅叔庵の盛衰を考えてみたい。出土した陶磁器の編年観では、17世紀末から18世紀初頭の時期に位置付けられる磁器が最古である。すなわち、正三が生存している時期に遡る遺物は出土していない。そうするとこの遺物が示す時期に居住した可能性がある人物としては『武蔵名所図絵』に「堅叔庵二世」と記述されている弟子の恵中が考えられる。この恵中は正三が江戸に下向してすぐの慶安4年（1651）に弟子入りし、その後元禄16年（1703）に76歳で逝去するまで、精力的に正三に関する著作物を刊行している。今日広く正三の思想が伝えられているのも、この恵中の努力が大きいものと思われる。『武蔵名所図絵』によれば、この恵中の木像が堅叔庵にあると記されており、現在は先の長泉寺に位牌とともに安置されている。恵中の生涯については不明な点が多いが、現在彼の木像はこの地にしか残されておらず、また正三の供養塔と並んで恵中の塔も同じ敷地内に並べて残されていることなどこの地に多くの足跡を残している。このような状況から、恵中が正三遷化の後にこの庵に居住した人物として最もふさわしいと考えられる。

その後出土遺物に示される年代としては、数十年を経た18世紀中頃の遺物がある。この時期においては特定の人物名が挙げられないが、堅叔庵において正三の教えが受け継がれていたことを示すものとして、現在、正三・恵中の供養塔と同じ長泉寺の敷地にある顕彰碑が指摘できる。この顕彰碑には「寶暦八年」・「萬松山堅叔庵　謹建焉」の文字を読みとることができる。宝暦8年は1758年であり、すなわちこの顕彰碑は正三遷化後100年を記念して建立されたと考えてよい。施主は明らかではないが、堅叔庵の名によってこの碑が建てられていることを見ると、この時点で庵が十分機能していたことがわかる。残念ながらこのあたりの事情を記した文書が見つかっていない現状では想像を働かせるしかないが、井上家の庇護の元にあったと考えられる。なお、この顕彰碑は頭部が丸い自然石に刻まれているが、第12図の絵図において供養塔の横に頭部の丸い碑があることから恐らくこの顕彰碑を描いているものと考えている。さらには正三の供養塔であるが『武蔵名所図絵』によれば「高さ五尺五寸許」と記され、現在の場所に移されている供養塔は約172cmを測るものであり、この大きさと無縫塔を示すような塔身の状況から判断して、絵図にはこの供養塔と顕彰碑が描かれていると考えられる。

最後にこの堅叔庵の消滅についてであるが、これも記録はなく不明である。しかしながら長泉寺に先述した木像や位牌が移された時期が明治初年と伝えられることから、この頃までには絵図に描かれた状況で存在した庵も老朽化により取り壊されたと考えられる。その後も山頂の石塔はそのまま残されたままとなっていたものであろう。その後陵墓地となった際に石塔類は現在の場所に移転し、そのころには堅叔庵の正確な場

所も忘れられ、口伝として庵が存在したことは伝えられていたようである。それは大正天皇多摩陵の造営とともにこのあたりの地誌が数多く発刊されているが、いずれの書物でも堅叔庵と山頂の石塔について触れている（註４）。しかし記述は先に示した江戸時代の書物をそのまま引用しており、この地が正三の終焉の地であるとの記載となっているなど正確さを欠く。また、堅叔庵の正確な場所は特定していない。

以上堅叔庵について、今回検出した遺構・遺物と絡めて記述してきた。正三の江戸時代における活動状況を考えていく上でこの堅叔庵は重要な場所であるにも拘わらず、これまであまり明確なことがわかっていなかった。今回遺構として検出されたことと、遺物が出土したことによって今後議論が深められていく一資料になるものと思う。

なお、今回検出された遺構は、第６トレンチの項目でも述べたように、すべて土嚢で養生した後埋め戻し、現状保存を計ることとした。そして第６・７トレンチを設定した「庵の山」一帯は、東京都の周知の遺跡「堅叔庵跡」（遺跡番号 1028）として遺跡台帳に登載された。　（徳田誠志）

註

（１）　小田野遺跡発掘調査団『東京都八王子市 小田野遺跡発掘調査報告書』、1996 年。

（２）　豊田市郷土資料館『特別展　鈴木正三　－その人と心－』、2005 年。

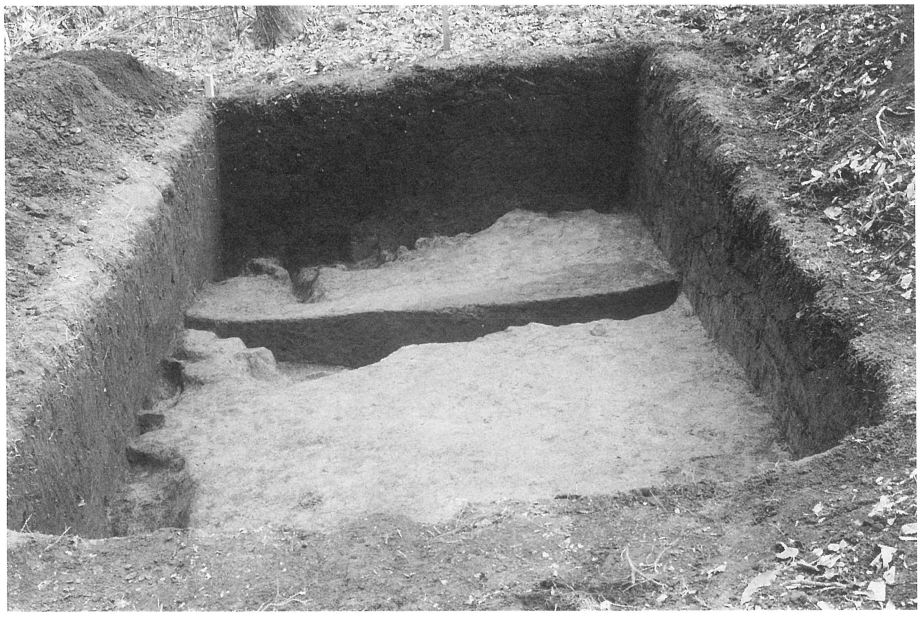
（３）　鈴木正三の研究書は多いが、年譜などは以下の図書を参考にした。
鈴木鉄心校訂・編集　『鈴木正三道人全集』山喜房仏書林、1988 年。
鈴木正三顕彰会『今に生きる　鈴木正三　その足跡』、1983 年。
松井孝宗「鈴木正三ゆかりの寺　堅叔庵（長泉寺）」『豊田市郷土資料館だより』No.50、2005 年。
なお、鈴木正三の地元である旧足助町足助資料館に本部を置く「鈴木正三研究会」には『鈴木正三研究集録』第８号（2005 年７月刊）の寄贈を受けるなど、多々ご教示頂いた。記して感謝を表するものである。

（４）　この場所が陵墓地に指定された直後に、多くの地誌類が刊行されている。そのひとつとしては、下記の図書がある。
内務省地理課『多摩の御陵を繞る史蹟』1927 年。
なお、このことについての研究論文としては、次のものがある。
保坂一房「多摩陵造営と郷土史研究団体」『多摩陵の造営と地域社会』、多摩地域史研究会第 15 回大会発表要旨、多摩地域史研究会、2005 年。

追記　『武蔵名勝図会』の閲覧と第 12 図に掲載した絵図については、日野市郷土資料館および同館学芸員中山弘樹氏にご高配賜った。記して感謝申し上げるものである。
なお、第 12 図に掲載した図は、下記図書より転載したものである。
片山迪夫『武蔵名勝図会』慶友社、1993 年１月 22 日、新装第１刷。

鈴木正三と井上家については、現当主井上 篤氏よりご教示賜った。また、長泉寺に安置されている御木像などの拝観についてもご高配賜った。併せて感謝申し上げるものである。

## 図版14



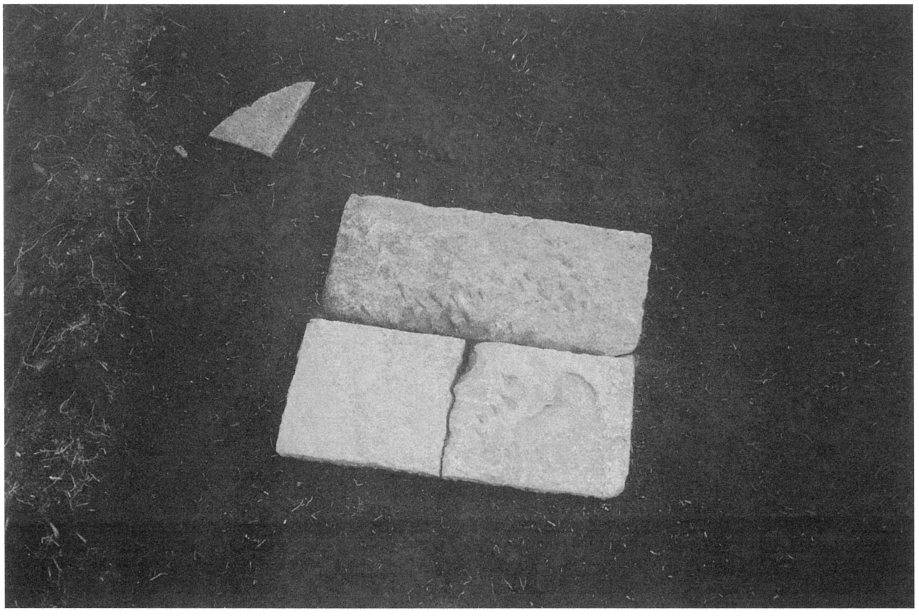
1　武蔵陵墓地
D地区　第５トレンチ
完掘状況

2　武蔵陵墓地
D地区　第８トレンチ
完掘状況

3　武蔵陵墓地
D地区　第10トレンチ
完掘状況

1　武蔵陵墓地
　Ａ地区　第６トレンチ
　完掘状況

2　武蔵陵墓地
　Ａ地区　第６トレンチ
　集石土坑半裁状況



3　武蔵陵墓地
　Ａ地区　第６トレンチ
　板石検出状況

## 図版16

1　武蔵陵墓地
　Ａ地区　第７トレンチ
　堅叔庵跡検出状況
　（西より）

2　武蔵陵墓地
　Ａ地区　第７トレンチ
　堅叔庵跡検出状況
　（北より）

3　長泉寺所在
　石平道人・恵中供養塔
　（八王子市長房町）